

孫久郎



利5
1847
2



1847
2

換おた車

秋の部



月をくれぬるやもよの秋月夕 風虎
 天川あけくもぬるもゆにきり 自悦
 早谷や勢女も朝の糸よそ 嵐雪
 権をこしらへたりあつれくれ 権花
 魚汁や魚汁とらんこの川 綾戸
 大内此かきりもさん思まらり 千子
 早合やれはらうく鶴のさん 壽閑



後思

夕夕よのさねの後の後思は 由之
早もか女乃のさねの許いん 其角

贈桂花堂

舞子曲ル念ひ乃一うれ 露沾
舞や碇乃日影のくけし 蚊足
舞乃二人かうさくあさか 杉風

驚夜雷

よに晴く舞 雷に潔イサキヨ 其角

寄李下

いかにさきいふにさう 芭蕉
いかにさや葉山子れあゆむ川向 岩泉
いかにさやねりく 湖風
いかにさき目をもとめ 魚兒

遊女とさるるあつちあつちを
いかにさきいふにさう
あつちあつちを

露は烟は母乃外のさうけ外 去來
父母乃親灯篝物もあやん外 由之

たうおし人の数も幸かゝりに折れり 金峯
ふるく魂乃家よ葉く小風く好 文旆

親きききみ
ひんづるに夜
こゝろしきちんく

女餓鬼すく金今よあせやけのら 文鱗
金とハ秋なきも門乃灯籠か 嵐雪

貧
魂やうん糸くぬ糸く願 蚊足

對愁

ここのあらしし人や隣乃玉糸 其角
るまきくつり門のを食れ親らん 同
送り火乃山いさのあれも 観水
朝つらん浦つら子れけり 苔翠

志かろのらた周

とれそのいかり 踊に歌はり 自悦
躍子よあすの島乃州あうん 去來
音月色 舩ちくく 玉火くれ 春雷
吹ふせく江乃一隅水と雪方 苔翠

くせ約てふるもあめいあ外 春雷

禪師ふふのこ

おさつるもあめいあ外 文鱗

遊女の酒をたはす

ゆきや光湯乳のこ乃蕪くん 同

女印かあふもあめいあ外 景道

下園をすもゆふた乃一ふくた 冬柏

常陸へはるりく

華舟のあふり起るる後芦が 全峰

つたの秋草にこいあくあふが 曾子

萩ふや一ふふやせ山乃た 芭蕉

旅宿

も程頃ふたんあふるに海入る 観水

入湯の比

夕萩乃つめにんく流湯起井 紋水

本かろ山中

秋ふれすくあふあを放ク雨 舉白

鶴啼くくあふああ山外 同

山先の秋の〜紋水

兄去来の〜

伊勢へ詣けるるすうら
初穂の〜

伊勢のよれを〜千子

はも草のよれを〜同

うけふふるを〜切ぬ風外
治荷

聴閑

養生のよれを〜芭蕉

やふ〜

何と書も〜嵐雪

し〜のよれを〜沾蓬

聖護院のよれを〜

入る〜

峯入の宮を〜宗因

かげおれ貝よ〜具角

早稲酒やほ〜虚谷

さ〜のよれを〜野水

さるれ山を〜具角

望まわく富を乃く此れがし非 紋水
秋の野やんえろ少き切 鳥 塵谷
草中やわらわくへて字か 風虎

草庵乃月見

名月や池をめぐりおとけり 芭蕉
雲影し人な休むる月んか 同

庵跡に訪ひて宿根本寺

ちよひて珠うけぬる月んか 同
名月と戸ぬて又も庵ん名跡 折風

月んく較のたつよりのめが 季下
亦人なぬるもんくきの月 観水

月下獨酌

月んをやは紫式ア妻あけて 蚊足
月露を若粒切ほくを青か 巴風
ちよひても東むくも月昏 去來
人なあつうひなつて月ん外 野鳥
月んぬきにふあ込 孤屋
梅の人月んをきやみるれ猿 破笠

宗鑑の強さ高ののこり

貞室よりきたたらはあし

新日割して三人の曲

古袴月よ舞わす 我をこゝる月外 文鱗

誤伝しりし小座破りて

おぬのの体息

仕ゆられし

月のこゝろい我里人の暮来らん 去来

月影あり富士をちりし月外 冬市

月満く揃干うくく月外 由之

盲より啞のりかき月外 去来

名月や御堂に鼓かひてゆき 其角

良夜雨意

いさよひもらんや 十四日 同

尋常れこり月外をよらぬ 彫棠

月撰

同ちをいふもたあらん凡破船 鹿谷

水鏡乃思くかきもて月外を 魚兒

商人をんるものごとや月外 文鱗

名月や雲のいある土外 且只

名力なき藤の舟に鳥は乱きり 濁子
 おひきまゝの月乃星より外 蚊足
 中よおく月一箇や宵のき 似写
 名月ハ汐よぢうく小舟外 吼雲
 鉤そらうげよぢうく月乃外 一林
 名月や日が名月らあゝん 如泥
 秋のあそびなり多さうの藤さか 幻呷
 一ちづりの秘しぬおれをそ外 李下

藤がねくまらむほらなぞ
 ありきおもしろい人
 ちりきれやうなうり
 秋きおよ夜ぢう小藤のや外 干子女
 ちと物も藤くまらに秘しぬ 去來
 藤かきてちぢうあり破笠
 藤人よ村よまらむこゝ外 金峯
 山里や磯よかぢう外 沢風
 子れ泣くちぢう喜おむ外 山川
 婦らきれ大蛇をねむ外 蚊足

の奥に

おあ

砧をくくられよ字々や坊妻 芭蕉

獨床

あかり再々砧を笈ふ風うれ 西比

秋興 廿四句

面白く物うさりのい砧うれ 露荷

灯遠く 緋乃雨 角

榎を敷く窓の窓は月影 日

ちりくも雲ありく心襟落 日

しら成包。鷹居ては 角

山寺の鬘をあらしは新しん 角

雲中さめく暮涼の起臥 角

新妻鳴子を於しは仇作り 角

東あがりの道の高み 角

夕園の道よ馬はよ離りて 角

兵やよみ 三石の粟 角

先掲 むぬす人 とおし き 荷

酒 買 り 出 る 草 庵 の は 角

水 ゆ く 橋 乃 上 より 細 お り る 日 角

游 習 ひ は あ と 小 船 の 子 荷

夕 月 あ 急 田 所 危 と くら り あ ん 角

多 め ぬ 戸 立 る 電 光 志 意 荷

在 室 さ に 婦 ら 在 心 あ く は 角

召 れ 半 一 心 精 ひ ら 荷

御 盃 初 め 正 乃 あ り 初 極 角

甲 子 乃 達 歌 い 長 の 大 和 歌 荷

と 次 あ る と 傘 巾 ひ 人 鏡 月 角

牛 の 地 を 暖 く 介 し る 荷

重九

三十九

あ ら と 名 れ た ま わ と 行 く 筆 た 蚊 足

四十

年 流 よ 柔 れ り ろ く ぬ に か り 同

第 九 情 春 に あ る く 秋 も り 露 路 沾

御蘭亭に習ながらん菊あるは巴風
年へのの香もや一也の氣 衛門
菟島のゆきふたき一蘭の菊 其角
菊熱く水くむるれ 岩翁
いそふ七ナハ百ウ此作を菊に致ん 具角

艸菴雨

起ある所菊ほのや水のあと 芭蕉
瘦あうわアハれふ菊れつ百ガ 同
雨きし地も遠ハ菊きとえおん 具角

雨敷月市ハかくあれ菊のふ 文鱗

籠り

花葉れいがありとも 籠り 籠水
花葉よ葉ゆきかゆる嵐くれ 透雲
あゝるに甲斐あるはや稚の音 岩泉
物れかゝるめや稚乃乃折 三翁
草ふろ夕月好のつらき 観水
童さへ拾 往乃いそり 同
柞落く松茸みよあ白く如 魚兒

秋草やわづらひ奥の庭の松 孤屋
秋草や一日くらする松の 三翁

京出旅日

片腕をさやとに袖すみ余糸 寺尾
ふちりくはせぬ掃き松の目
谷ひら星餉さるるみ余糸 冬市

飯沼

紫書や槐のころく松の葛 巴風
家神れ多やほせの村時 遊女 薄雲

岸の秋籬あ——の夕掛 冬市

秋山二句

甲斐のつゆもるあすの秋の夕掛 露沾
秋山や弱もゆるるあ 鞆乃上 長角

閉門不覓句

秋をしく目土塗るも旅 三園
不のこころい菊鶏によ城の舟 舟竹

秋盡

俣の入の縄乃すれよ伏の昏 不炊

こたへ

ふりあきらじいれとやなり
秋のこれ 一鐵

六客 歌仙

述懐

破笠

をい食よりめがらふあきぬくし
その秋とま貝か虫か蟻か 其角
のこころの秋は 憎む青をかし 全
月よりいゆるせうと菜の敷 笠
うきもきもいづるぬる春のこ等 同
心もあつき思衆のうが子 角

うき

人志れを遠よりえ入る上りた
別をいづるをいづるをいづる 笠
名うき名隠をいづるをいづる 同
あつてもあつてく味もあつても 角
鍋よりて筑士の市めくもいづる 月
色酒のせよそのを彌めく 笠
川あゆみ懐くあつて涙もく 同
けり捨るふくちの箱磨 角
秋けり如き宿る天の下 月

松を産所よむそは月
 空買ふゆを却つまむのき
 雪消をむる甲斐のる玉
 無^谷久^{無事}のむかるむや堂を
 死出入鳥の燭を喰
 し物し道園の捨子に晴祐り
 家もむらむらむらむら
 昔を鐘の響く人よか
 高きうらむらむらむら
 同 同 同 同 同 同 同 同

釈教
 月^ウの^ウつと^ウ際^ウの^ウむら^ウる
 佛本むらむらむらむら
 定りぬむらむらむらむら
 鐘^{ヒノコシ}の^{ヒノコシ}むら^{ヒノコシ}る^{ヒノコシ}むら^{ヒノコシ}る
 瀬^{ヒノコシ}の^{ヒノコシ}むら^{ヒノコシ}る^{ヒノコシ}むら^{ヒノコシ}る
 深^ウの^ウむら^ウる^ウむら^ウる
 七^ウの^ウむら^ウる^ウむら^ウる
 名^ウの^ウむら^ウる^ウむら^ウる
 さ^ウの^ウむら^ウる^ウむら^ウる
 同 同 同 同 同 同 同 同

癩^{ラユリ}落^ラとと 柳^{ヤナギ} 以^ヨて 角^{ツノ}
かつ^カつ^ツとを 軍^{イクサ}の 神^{カミ}は 花^{ハナ}の 同^{ドウ}
春^{ハル}と 海^{ウミ}の 人^{ヒト} 大^{オホ}宮^{ミヤ}司^{ツカサツ}の 相^{サウ} 笠^{カサ}

雷^{カミナリ}之^ノ義^{イミ}那^ナ之^ノ九^ク集^{シツ}

不^フ持^ヂ乃^ノ部^ブ

十月十一日 餞^{シノブ}別會^{ベツカイ}

縁^ヰ人^{ヒト}と 我^{ワガ}名^ナの^ノま^マの^ノ人^{ヒト} 妙^{ミウ}齋^{サイ} 芭^ハ蕉^{キウ}

亦^{モト}人^{ヒト}の^ノ世^セの^ノ宿^{ヤド} 由^ユ之^ノ

鶴^{カササギ}乃^ノ心^{ココロ}の^ノ世^セの^ノ宿^{ヤド} 其^{ソノ}角^{ツノ}

粉^コ色^{シロ}の^ノ山^{ヤマ}陰^{カゲ}の^ノ露^{ツルシ} 松^{マツ}風^{カゼ}

ふ^フの^ノ世^セの^ノ宿^{ヤド} 文^{フミ}麟^{リン}

新^{ニホ}舞^{マヒ}臺^{ダイ} 月^{ツキ}の^ノ光^{ヒカリ} 仙^{セニ}化^カ

中の秋エカキ盡ユ一つさかへるおと 魚見

新シしりしあつくるカラ渡舟 観水

浮ウ也ヤなナひヒくク波ハのノひヒま 全峰

露ツとト御ミ引ヒきキるルみミ去ク 嵐雪

酒サのノまマとト体タもモあアまマのノ並ナ居イくク 執業

知チ月ツキのノまマとト極キつツくクもモ 翁

鯨クジラつツるル袖スベつツくクはハらラりリ多タ瀬セ川カハ 由之

蕨ワケ一ヒト面オモのノこコるル橋ハシ杭カ 良角

遠トホくク遠トホくク遠トホくク遠トホくク 秋風

月ツキのノやヤ啼ナんン泊トク瀬セのノ菟ウ 文苑

身ミ美ミくク白シロひヒ都ツりリくク 仙化

かカくクくクくクくクくクくクくクくク 全略

遠トホくク遠トホくク遠トホくク遠トホくク 翁

沖ナギサくク舟フネのノまマとト誰タレ 由之

花ハナのノやヤ若ワカのノ舟フネをヲ見ミつツくク 気霄

剥ヒくク雁ガシをヲ見ミつツくク 琴コトれレ手テ 舉白

各各のノまマとトまマとトまマとトまマとト 観水

萱タネ乃ハのノゆユけケのノ花ハ雪ユキをヲ燒ヤくク 仙化

老の乃乃繩あめねまゆるりはる 由之

素流より 疎の園也 龜

の霧を千瀉る松をかきくは 琴白

命成かり 無子 這蟹 丹原

老出くまのけらん海のこゝ 流雲

志くを御寺なぬ新むまの 龍水

露や石の心地中日月 全嶽

小畑より 氣楽山子 松尾

坤の戸なるを酒債サカラのむら 石

つはまの星を晴よりの 峯白

蕪のまのこ面白く夕涼み 仙化

織より 戌乃天王 且角

所收路乃笛吹おの 壺色 全峯

備くろくく 勝子 松尾

えんしと文字の子昂サカケリ味く 久麻

堺乃錦 蜀をあら 龍雪

陸の乃寄出の友より交りあふ 龍水

花より出く 龍雪 菊

谷深き日くくむの本同の 翠白

あゝをくればくを奈りゆき 由之

色蓮番全四新

呵うまをせの野まきこそく 露花と 露沾

鳥中をさる

もろくしのくせく真乃頭中ハ 素堂

前との中一は渡ぬくしきの菊 不ト

ふかうのゆりりろくくハ 嵐雪

つふ鳥富ををんくも塔うん坂 杉風

小和風

比一を大井乃嵐佐夜の妻 蚊足

栲よてを流してふんをぬ乃親 仙化

張孫とく紙小二つハがくくし 枳風

ぬぬれ紙小やねもさおの松 李下

もあすれすまもれあひ

ぬこさんかく送りゆさん呵あひ 文鱗

呵あひに溢かりあふん押乃房 舉白

お根山志くれなふ目を致ひひり 由之

蒲園借女もあ 旅の如 露荷

萩枯をもちの紙箱をこまぞ 沾蓬
宿とられぬ清く閑に秋葉めせ 如泥
その白をけりてささくほまれか 溪石
みづれを忍ぶ首途や花のをき 其角

詩歌文集 一巻

さうれづくさへにりて入日か 杉風
眠りもるかをさへにりてす 沾蓬
きよわしとるよこほくさくれか 去來
ふくむくくちよのささくむむか 蚊足

蝶のわろ遊遊とて命を朽をす 冬市
暁のうつくしきとて舞のりもむか 為勝
ゆふく入る葉集ゆかぬか 沢風
牛池の蹄をさくはも葉を好 好柳

深川夜泊

みづとてや夜の本魚をいやめ 李下
想ひあつしつる心りぬ 巴風
おと枯るく月よあまる 飄々 同
松白と枯地を月より見ゆ 和風

萱屋の夜あけけりりきあま
琴風
心志は備とわらん少ゆあま
ト子

甲斐おや
中宿
いそいそおきく

カコヤクしあや
破笠

くつとれや
野馬

えれりしせき
尔キ

古寺れお
吼雲

芭蕉いり
素堂

新巻

我旅の暮とさ
好柳

和昭柳子

人をまへん
其角

なめう酒漬
好柳

塩ゆり
由良

夜坐
一白

何れゆく
其角

くつとれや
同

梅紅乃らうらまはるるしり洞るぬ
 明きく世回ハ寒しゆり
 炭くもむ育く氷る露鳥さ
 灯の影も影すひら火燈り
 燈を繞る命運道楳の蟻
 炭竈とともく経り法師が
 茶の毛も炭くも影を足すん
 寒蠅
 情りれておろく人冬の蠅
 紋水
 蚊足
 嵐蘭
 魚兒
 不炊
 巴風
 具角

法華を字はわり
 深著世樂無有慧心
 此とありし水報もあつたは煙り
 炭の毛も炭くも影を足すん
 嵐雪
 景道

宿僧房

あまき水一圓伽の抄教冬菜
 駒形子流来習りや念佛
 川乃々々々水休寒多紅
 曉乃つくばよもや念佛
 星ひら五位一みれおる
 其角
 三園
 湖水
 其角
 湖春

爰後中 浮桶くるる みるは 冬柏
水多の朝日 蹴ゆるる うねりが 由之
あの男 後め 帰るう 夕ちとる 山夕
鈴ゆる 海鷹又 暗入る 尾上哉 冬市

十一月九日とら 高橋乃

初ちや 幸ニ 菴ニ 芭蕉

笑う友人

君の火をいけ いんをいなる けうまの 尺五神 同

山形乃夕とる

おもひ 程く ころり ちぢ 小ね 冬
積り 市に 叫カケ てる 雲れ 冬
窓ゆる 片カ 結 雲 降 夕 魚 兒
言 ぬら 色 ころり 雲 ね たる 音 孤 屋

反静亭よりおろく

比良乃 ちぢ 未 翻 たり 詠 ぬ 冬 自 悦
ふれ 小 ね てる も ゆう ぐ 雲 降 冬 文 鱗
けり 鳥 渡 所 なる 雲 ね 冬 獨 子
さす ちぢ 破 凡 たり 出 煙 冬 自 棄

初もつに目をせむるは流竹外由之

戸路の占公より初書

うつ書よこ盆にもしくを採す 其角

ふれ朝 言ふらにむく

月比こく鼓も書れあした井 露沾

漸るらるるつたにほる炭 露荷

珍箱張の籾の竹をらるる 其角

鉄居

二すしはらびをせむるは道のみ 沾徳

ふれくとむりしこも書れ海舟 字重

幸流の好きし書れ鉄丸 観水

とれりや汐の平河の石をらるる 紋正

馬の白や鉄をらるる書れをらり初る 白兎

慶運の鬮舞や書れをらるる書れ 紋水

夜あしや夜祈を拂ふ書れをらるる 流舟

初書れ川長よと書れをらるる書れ 仙化

白川や園よ書れをらるる書れをらるる 東頰

草庵

門乃言機ありやと 訪れあり 其角
雪大もや採り日此より 通ちし 全奉
飯のくし雪あり 観る人々 枳風
門の亦傘ちりく 尺ちれれ 弁鉞
雪深し 斜^{ハアラ}白ふりれ 鉤雪
梅されれ 笠もより 雪霰 二齋
福金丸 僧よりし 冬の物 露沾

湯成五倫

君臣有義

其角

家のまゝるらめを 志しれれ

父子有親

鮎汁や 憎むるも 恨れ

夫婦有別

御ねくさめれ ありし 義也

長幼有序

袴着の娘乃 ありし 義也

朋友有信

君より 我婦に 義也

水家此と一と...
下十四

注荷

節分

豆とりく我もみれ鬼とらん

野馬

市に入らざるも...
素堂

素堂

うきまを...
魚兒

魚兒

碓より少い存り...
紋水

紋水

室乃津よ...
如泥

如泥

子を祝す

羽子極よ...
露沾

露沾

歌よむ...
文鱗

文鱗

淋...
枳風

枳風

け...
孤屋

孤屋

年...
去來

去來

ふたご

急外く...
蚊足

蚊足

市...
舉白

舉白

た...
嵐雪

嵐雪

年の市...
芭蕉

芭蕉

閑

辛の一夜王子の狐ににゆくん 素堂

晦月くや此念の入て大晦日 蚊足

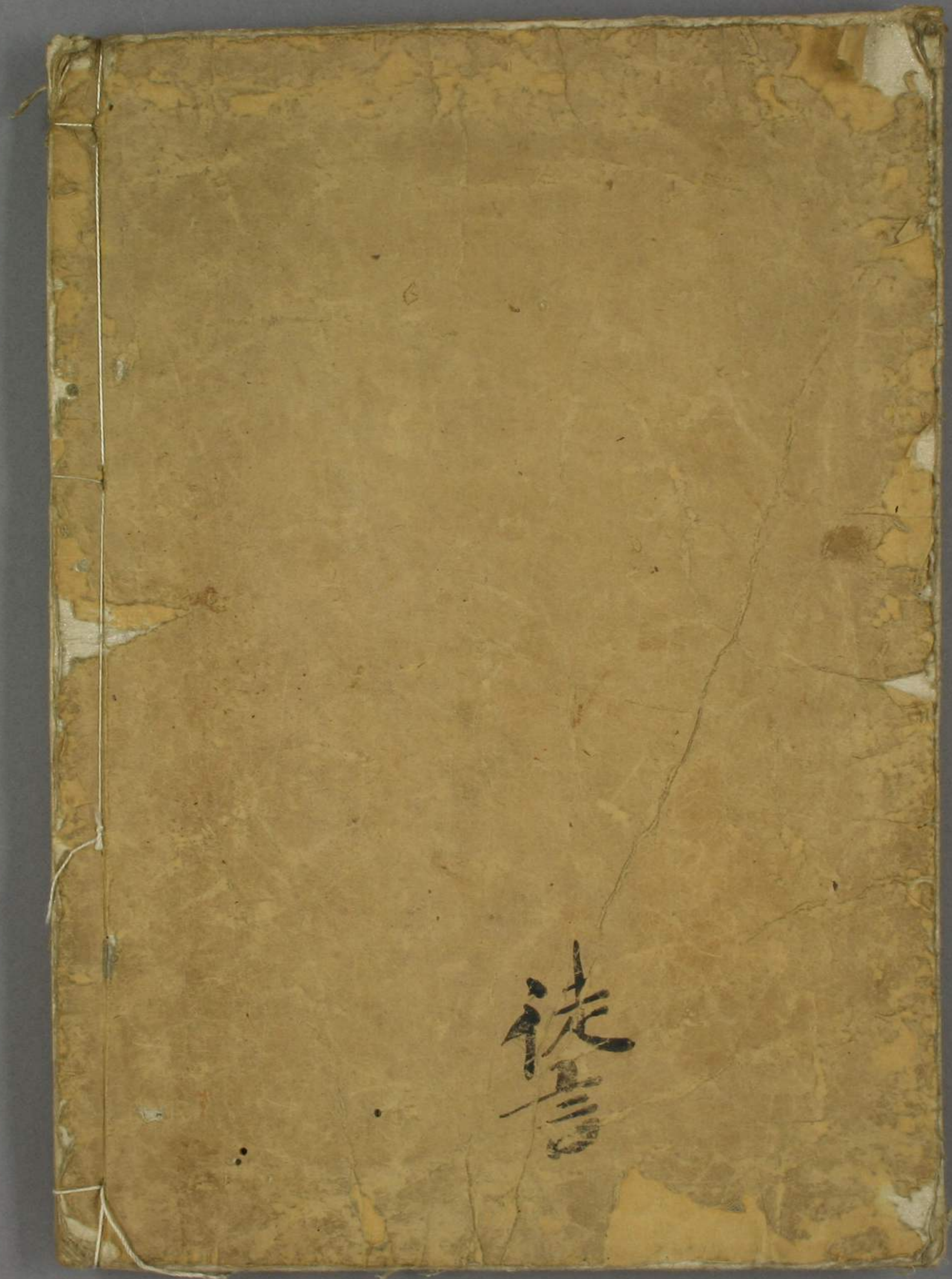
月雪のささちりあし 芭蕉

辛くは梅

みあもいといくらさるへだのれ 其角

貞享丁卯歳霜月仲三日

皇都書林 京堀川通錦小路土町 西村市郎右衛門藏版



徒言